



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	今様和製「検察官」：フセヴォーロト・ヴァーチェスラヴォヴィチ・イワーノフとナイリ・エギザロヴィチ・ザリヤンの北大「視察」(20周年記念号)
Author(s)	北垣, 信行; Kitagaki, Nobuyuki
Citation	スラヴ研究, 20, 211-213
Issue Date	1975
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5057
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113019.pdf



今 様 和 製「検察官」

フセヴォーロト・ヴァーチェスラヴォヴィチ・イワーノフと
ナイリ・エギザロヴィチ・ザリヤンの北大「視察」

北 垣 信 行

スラブ研究施設は今でもソヴェトの文化人や外国のスラヴィストが北海道を訪れば必ず立ち寄る所になっているに相違ないと思っているが、私の北大在任当時もそういう例はしばしばあった。当時駐日大使だったニコライ・トロフィーモヴィチ・フェドレンコ氏の訪問もその実例のひとつである。が、中でも私の印象に最も強く残っているのは、今は亡きソヴェト作家のフセヴォーロト・ヴァーチェスラヴォヴィチ・イワーノフ氏とナイリ・エギザロヴィチ・ザリヤン氏の北大訪問である。

イワーノフ氏が日本から帰国して1, 2年して没したのは1963年だから、彼とザリヤン氏が北大を訪れたのは1961年か二年、今から13, 4年前ということになる。その当時私は北大の露文科の主任で、同時にスラブ研究施設の研究員も兼ねていた。

ある日突然、この二人のソヴェト作家が大使館員のコマロフスキイ氏に案内されて北大を訪れるという知らせが入った。正に青天の霹靂ともいうべきこの急報に私たちロシア文学科のメンバー、私と福岡講師（現在の露文科の主任）と松井助手（後に東京教育大の助教授となり、今は故人）は、それまでソヴェトの有名な作家の訪問などは受けたことがなかつただけに、まさに検察官到来の知らせに接した市長以下の役人どもの場合を彷彿させるような恐慌状態に陥った。で私たちは早速歓迎の手筈を調べて、客を待ち受けた。まず現在の本部の建物の二階にあった私の汚い研究室を掃除して、急遽図書室からソヴェト作家のありったけの全集を運びこんで、それまでは19世紀作家の本しか入れてなかつた書棚にそれを麗々しく並べた。しかも、一番目につく場所にフセヴォーロト・イワーノフ全集を並べたのである。この思いつきは見事功を奏した。三人の客が研究室に入ってきて挨拶を交わす間に、イワーノフ氏は眺めまわした書棚に自分の全集を発見したのである。このとき私たちが下手なロシア語でどんな話をかわしたかは記憶にないが、ただひとつイワーノフ氏が「япония культурная страна!(日本は文化的な国だ)」という感嘆の言葉を連発していたことだけは覚えている。こんな、首都から見て僻遠の都市の大学にロシア文学科やスラブ研究施設などがあり、しかも自分の作品の全集を見いだそうとは思ってもよらなかつたからに違いない。このとき更にアルメニアの詩人で作家のザリヤン氏のせめて作品集でも用意できたとしたら、なお一層客たちを喜ばすことができたはずだが、生憎ザリヤン氏の著書は露文科にもスラブ研究施設にも一冊もなかつた。それどころか、ザリヤン氏については私など一片の予備知識も持ちあわせていなかつたのだ。フセヴォーロト・イワーノフ氏については、彼が《パルチザン》《装甲列車14—69号》《色ある風》《ゼレーズナヤの破滅》《パルホメンコ》等の作者で、中でも《装甲列車14—69号》は劇化されてソヴェトでは人気のある芝居のひとつであるというくらいの知識はあつたが、ザリヤ

ンについては皆目知らなかったのである。彼もまた優れた詩作品や長編小説を書きおろし、レーニン勲章まで受けている作家であって、アルメニア随一の画家のサリヤンがこのアルメニアが誇る詩人の肖像を残していることなどを知ったのは、私がすでに東京へ出てきてからのことだった。二人の風貌について言えば、イワーノフ氏のほうは体つきこそそれほど大きくはなかったが、堂々として、顔つきも生粋のロシア人らしく人がよさそうに見えるながらも毅然たるところもあるのにたいして、ザリヤン氏のほうは、身長はあるが割合に痩せ形で斜視で、あまり風采はあがらぬながら、行動的で、詩人というよりもむしろ政治家的タイプのように感じられた。それもそのはず、今百科辞典を開いてみると、ソヴェト共産党員で、アルメニア共和国の平和擁護委員会の会長を勤めたこともある人物なのだ。

イワーノフ氏は愛おしむように自分の全集を一冊々々手にとって、暫く感慨にふけっているような様子だった。

そのあと、学部長から学部長室の隣の応接間を使ったらと勧められるままにそこへ移って会談に入った。主に福岡氏が客と話を交わしていたようであったが、話の内容が何であったかは全く記憶にない。ただ、新聞記者が二、三人入ってきて、写真をとったり質問をしたりしていたのだけはよく覚えている。

つづいて、話に切りがついた頃客たちが学長に会いたいというので、電話をして、学長室へ客たちを案内した。この学長は一度会った人の名前を一ぺんで覚えてしまうという特異な才能の持主だった。その学長に客たちを紹介し、挨拶がかわされたあとで「スターリンもアルメニア人でしたね?」と聞かれたときは、私も思わずひやりとした。日本は文化的な国だと思いこんでいるイワーノフ氏にこれがどういう作用を及ぼすかと少々心配になったのである。が、コマロフスキイ氏がそれを通訳しなかったのは勿怪のさいわいであった。

次いで最後におこなわれたのが肝心のスラブ研究施設の「視察」である。「検察官」に当てはめれば、偽検察官の慈恵院の視察といったところである。鳥山研究施設長、山本（現在は明大教授）外川研究員（現在の研究施設長）たちに迎えられて、一行はぞろぞろあの石造のスラブ研究施設に入った。そしてあの立派な堂々たる図書室を練り歩き、あの小さな見すばらしい応接間で長い卓を囲んで会談が始まった。ここで客たちが語っていた私が覚えている話題は二つだけである。ザリヤン氏は悲痛な面持ちでアルメニア民族の苦難の歴史を語り、第一次世界大戦のときはトルコ政府に殺戮されたり強制移住させられたりして、人口が半減したといったような話をした。一方、イワーノフ氏の話はずっとくだけたもので、日本へ来る前に幼い孫に日本へ行くという話をしたところ、孫がぜひお土産に子供の鯨を持ち帰ってくれと頼まれたから鯨を買って帰らなければならないなどと冗談を言ったりして、いかにも好々爺らしい一面を見せていた。いずれにせよ、このときのスラブ研究施設での会談は至極和やかな楽しいものであったように記憶している。とくにイワーノフ氏はここへ来て初めて寛いだ気分になったらしく、始終にこにこしていた。

その晩はこの二人のソヴェト作家を囲んで札幌在住の文学関係者たちの座談会が開かれた。このときは初めから終りまでコマロフスキイ氏が通訳を勤め、私は単なるオブザーヴァーとして席についていただけだった。二人の作家はソヴェトの作家に関する質問に答えて、ソヴェトの作家の生活がいかにか恵まれているか、例えば2、3年に一作くらい書

今様和製「検察官」

けば生活できるといったような話や、ソヴェトではどこの職場にも文学サークルがあって、本職の作家たちが創作の指導に当たり、才能のある新人を文壇に送りこめるような組織になっているといったような話をしていた。座談会は終始まじめで緊張した雰囲気にもまれていた。

翌日われわれスラブ研究施設の者と露文科の者は一行の出発を駅のプラットフォームへ見送りに行った。イワーノフ氏は私に「ソヴェトへ来たら是非私の家へ寄ってくれ」と言って住所を教えてくれたが、それから、1,2年して彼の訃報に接し、ついに再会の機会を失ったことは、今でも残念に思えてならない。